

“

第3回講座 令和2年11月25日(水) 午後3時～午後4時30分

Small Talk の実際とデジタル教科書への接続

明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター

教授 石鍋 浩

明海大学 外国語学部 英米語学科

講師 前田 隆子

”

【講座内容の書き起こし】

高野先生：

皆さん、こんにちは。明海大学副学長、外国語学部長、そして本事業の責任者である高野と申します。前回11月18日の講座に引き続きまして、今日は第3回の講座を開催することとなりました。

本日のテーマは、「Small Talk の実際とデジタル教科書への接続」でございます。

さて、新しい学習指導要領には、コミュニケーション活動を行う目的、場面、状況などを明確にすることがとても重要であるということを指摘するとともに、簡単な語句や基本的な表現を用いながら、友達との関わり、これを大切に活動、さらには他教科等での児童が学習したことを活用したり、また児童の関心興味に合った、例えば学校行事等で扱う内容と関連付けた言語活動を行うこととされております。その具体的な活動として、本日の講座で扱うSmall Talk がございます。文部科学省の直山視学官は、こうっております。「この活動は、ライブで子供が本当のことを聞いたり言ったりする活動である。この活動のねらいは、既習語句や表現を繰り返し活用し、自分の考えや気持ちを伝え合わせる。できるだけ対話を続けさせることである。子供たちが、自分の考えや気持ちをどの既習語句や表現を使って言い表せばいいのかを考えて選択し、表現する。そうやって相手に伝わった時、子供たちの喜びは大きいであろう。また、友達が使う既習語句や表現を聞いて、その使い方についての理解もさらに深まるであろう。このように、子供たちはたとえ簡単な語句や基本的な表現であっても、身の回りのことについて、英語で自分の考えや気持ちを伝え合うことに自信をもち、もっと英語で自分の考えや気持ちを伝え合えるようになりたい、という風に思いを膨らませるであろう」と述べています。

本日はそのSmall Talk の実際や、こうした活動をどのようにデジタル教科書を使用してつないでいくか、こうしたことについて学んでいきます。

次に、本日の講師の紹介でございます。まず、石鍋浩教授は立教大学を卒業後、東京都公立中学校の英語科教員となられ、品川区教育委員会、都立多摩教育研究所、江東区教育委員会の指導主事を務められた後、都の教職員研修センターの統括指導主事として勤務ののちに、稲城市教育委員会の指導室長を務められました。その後、足立区立新田中学校、足立新田学園の統括校長、足立区立蒲原中学校長を経まして、港区立御成門中学校長を最後に、2018年4月から本学教職課程・地域学校教育センターの教授となっております。この間、東京都中学校長会研究部長、全日本中学校長会生徒指導部長、全日本中学校長会総務部長、そして東京都中学校英語教育研究会会長としての要職を歴任されております。文部科学省関係の仕事といたしましては、英語教育の在り方に関する有識者会議の委員、いじめ防止対策協議会の委員、中央教育審議会初等中等教育分科会、教育課程部会外国語ワーキンググループの主査代理、そして中学校学習指導要領、現行の中学校学習指導要領の解説、外国語編の作成協力者などを歴任してございます。指導主事、統括指導主事、参事、校長としての経験から、都内小中学校において、校内研修会、教育委員会主催の研修会を多数お務めになられております。専門分野は、英語教育全般、道徳特別活動、総合的な

学習の時間、生徒指導、教育課程、そして学校経営等でございます。

続きまして、前田隆子講師は東京女子大学をご卒業後、お茶の水女子大学で修士を取られた後、カリタス女子短期大学の准教授、そして東京女子大学の教員として、児童英語の科目や、英語教育全般の科目を担当しておられました。2019年4月から、本学外国語学部英米語学科の教員となられております。前田先生は、先にご紹介申し上げました石鍋先生とともに、本学学生がJ-SHINEの英語指導者資格を取るために開講しております「小学校英語基礎概論」を担当しております。専門分野は英語教育学、協同学習でございます。前田先生はこの間、中学生向けの学習参考書の執筆や、横浜社会人講座などで小学校英語に関する講演を多数執り行うとともに、児童英語に関するイベントを企画、または実施されているお方でございます。東京都教職員研修センター主催の小学校英語中核教員養成講座での講師なども務められております。

それでは、本日の講義でございます。お二人の先生方、どうぞよろしく願いいたします。

前田先生：

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、明海大学の前田隆子と申します。今日はどうぞよろしく願いいたします。本日第3回の講座の流れは、今、こちらにスライドで書かれております。1番から5番までは私が担当します。6番のSmall Talkからデジタル教科書への接続というところは、石鍋先生にバトンタッチをしたいと思います。

では、本日の目標をここで確認してみたいと思います。

1つ目です。Small Talkの目的や留意点を学び、単元目標と関連した効果的なSmall Talkができるようになる。ここは主に私が担当します。

そして2つ目の目標です。Small Talkから、デジタル教科書への接続について考える、こちらは石鍋先生が担当してください。

ではここから、Small Talkについてお話をしたいと思います。Small Talkという英語は、「小さな話」という意味ですが、一般的にこれは世間話ですとか、それから雑談というような意味で使われています。今回は皆さんもお持ちだと思いますが、『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』から、このSmall Talkの定義を今一度確認してみたいと思います。「Small Talkとは、高学年新教材で設定されている活動です。2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることです。また、5年生は指導者の話を聞くことを中心に、6年生はペアで伝え合うことを中心に行う」。このように書かれています。5年生では、指導者の話を中心に聞くということですから、いわゆるインプットを中心としたSmall Talkと考えていいかもしれません。語彙ですとか、表現に慣れてきた6年生ではペアでやり取りをするので、そういう意味ではアウトプットを中心としたSmall Talkとも言えます。

また、これは実は学年にとらわれなくてもいいのかなと思っています。例えば、3、4年生の先生であっても、インプットを中心とした、指導者が中心に話す方のSmall Talkであれば可能ですよね。それに、段々語彙や表現に慣れてきた場合、5年生であっても、ペアでお互いを伝え合う、そういったアウトプットを中心としたSmall Talkもできるのではないのでしょうか。

では、ここでSmall Talkのねらいを確認したいと思います。「児童が興味・関心のある身近な話題について、自分自身の考えや気持ちを楽しみながら伝え合う中で、既習表現を繰り返して使用して、その定着を図ることや、対話を続けるための基本的な表現(対話方略)の定着を図る」ということです。

今ここで、「対話方略」という言葉が出てきました。私たちも普段日本語を話している時には、相手に上手く伝わらないな、という風に思ったら、もう1回言ってみたり、もしくは言い換えたり、それからジェスチャーを使って説明することがありますよね。また、相手の言ったことがわからないときは、皆さんどうしますか？ 聞き返したりとか、それからゆっくり言っ

てもらったりとか、わかりません、という風に伝えたりしますよね。このようにして、相手とのコミュニケーションを図ろうとするこの方法のことを、「方略」と呼びます。方略というと、少しはかりごとのようなニュアンスがあると思う方もいらっしゃるかもしれませんが、これは方策とか、ストラテジーと言い換えてもいいです。

では、この「対話方略」に関してご説明したいと思います。

まず1つ目、「対話の開始」というところです。これは、対話を始める時の挨拶ですから、皆さん日ごろ授業の中でもたくさん使っている、Helloとか、How are you? とか。こういったことをたくさん言って始めてみるといいのではないのでしょうか。

次に2つ目、「繰り返し」と書かれています。相手の話した内容の中心となる語句、文、それを繰り返して確かめるというやり方です。例えば、I want to play baseball.と相手が言ったとします。そうしたら、Oh, baseball.とか、Oh, you want to play baseball.今、最初は語句で言いましたが、フルセンテンスで言ったりもできますよね。このように繰り返すことで、また会話につながるということです。

拠点校の先生方、ここで声を出してみたいかなと思うんですけど、いかがでしょうか。私が、I want to play baseball.と言いますので、Oh, baseball.と言ってください。

(前田先生の投げかけに拠点校で各自が応答する)

次は、Oh, you want to play baseball.と言ってくださいね。

(前田先生の投げかけに拠点校で各自が応答する)

これが、「繰り返し」というものです。

3つ目は、「確かめ」と書かれています。これは、相手の話の内容が聞き取れなかった場合、例えばPardon?とかOnce more please.のような形で聞き直してみましょう。こうすることで、相手の発話をもう1回促すことになるのです。

(前田先生の投げかけに拠点校で各自が応答する)

4つ目に行きます。「ひと言感想」というものです。これは相手の話した内容に対して、自分の感想を述べて、あなたの言ったことを理解していますよ、とかそう言って伝えることです。ここでは、いろいろな褒め言葉を覚えておくといいかと思えます。

例えば、That's good! とか、That's nice! とか、That sounds great! ほかに、「それ、本当?」なんて言うのも、これも一言感想として言えると思います。Really? という表現ですね。

(前田先生の投げかけに拠点校で各自が応答する)

5つ目は「さらに質問」とあります。相手の話した内容について、より詳しく知るために、内容に関わる質問をしてみましょう。例えば、相手がI like fruits.と言ったとします。そうすると、どんな果物が好きかな? って、気になりますよね。それを英語にしてください。What fruit do you like? このように疑問詞を使ってつなげていく、さらに質問をすると会話が続きます。

最後の6つ目が「対話の終了」です。ここはやはり、「あなたと話ができてとても楽しかったです」、ということを伝えられるといいかなと思います。例えばそれを英語にすると、Nice talking to you. こんな表現はどうでしょうか。

(前田先生の投げかけに拠点校で各自が応答する)

ありがとうございました。では次に、Small Talkのねらいです。教師と児童のいわゆるインプットを中心としたSmall Talkです。この場合のねらいは、正しい英語表現を、十分にインプットさせること。さらに、英語で会話することのイメージを理解させてあげることが、ポイントになります。今度は児童同士のペアでのSmall Talkのねらいです。これは、既習表現の中から適切な表現を自分で選択して、使うことを繰り返す中で、既習表現の定着を図る。やはり、ワンステップ上がってくるわけです。ただし、既習表現を選び取るということは、大変難しいのですが、その時は先生方が、児童が話したいと思われるような話題をぜひ提供してください。小学校の担任の先生方は、児童一人ひとりをよく理解なさっていると思いますし、子供たちの間で流行っていることや、そういうことも多分熟知されているのではないかなと

思いますので、トピックを選択するというのは、それほど難しいことではないと思います。最近だと、『鬼滅の刃』とか、それからペコパの「時を戻そう」とか、そういったものが流行っているかもしれませんね。ただこれを、英語でどうやって表現するのかということが難しいですし、それを既習事項とどうやって結び付けたいのかということは、確かに少し難しいことかもしれません。でもそのような時はぜひ、同僚の先生、それからALTの先生、アドバイザーの先生にぜひ頼ってください。「助けて」って言うてみましょう。先生方は、やはり「助けて」って言いづらいですね。これは、日本人すごく苦手だなんて、私は思っているのですが、やはり助けを求めることが大事なかなと思います。

さらに言うと、ぜひ授業の中でたくさん間違ってください。間違ったということは、発言したから間違ったことがわかるわけなのです。ですから、やってみたってことを褒めるためにも、ぜひそういう空気が作られるようにしてください。間違うということは、小学校の中で英語が一番やりやすいと思います。そういった空気を作ることで、他の教科や、その子供にとってもこの先の人生に、何かしらよい影響があるのではないかな、と私は信じています。

次に、Small Talkの最初の一步を皆さんと勉強したいと思います。ここに挙げたものは、本当にコミュニケーションの「基本のき」と言えるものです。

1つ目は「相手の話に反応する」です。できればその時に相手の目を見て、にっこりするだけでもいいのです。アイコンタクトとスマイル、これは結構キーワードになると思います。さらに、英語の相づち表現を覚えておくといいと思います。こういった表現を日ごろから、例えば英語の時間だけでもいいですが、Small Talkの時に先生も確認できて、子供たちも確認できるように、黒板の隅の方に吹き出しの形を貼っておくのも面白いかなと思います。

(前田先生の投げかけに拠点校で各自が応答する)

Uh, huh./ Me, too./ I think so./ Really?/ I see./ That's great!

はい、ありがとうございます。

では次に、話を続けるコツというものを知りたいという先生方がとても多かったので、やってみたいと思います。まず、次の言葉が浮かばないなという時は、Well,...とか、Let me see,...とか、こういうのはどちらも「えーっと」ですよ。日本語でも多分皆さんの会話を一日録音したら、「えーっと」はかなりの回数言っているはずですよ。ですから、ちょっと言葉が浮かばないなという時は、Well,とか、Let me see,と話しているだけでも、ちょっと英語を話しているよ、という雰囲気が出てくるかなと思います。

さらに、より長く話すためには、疑問詞を使うのもポイントになると思います。When? Where? How? Why? ですね。必ずしも、フルセンテンスである必要はありません。疑問詞をつなげていくことで、対話はどんどん、どんどん長くなっていきます。さらに、その途中でわからない単語があった時は、そこは日本語でもいいと思います。What food do you like? とAさんが聞いて、Bさんが、I like cheese. How about you? と尋ねる。AさんがI like Yakiniku. とつなげていけると、いいと思います。この後に、例えばALTの先生とかいらっしゃる時に、みんな聞いてみよう、一緒に聞いてみよう、子供たちと聞いてみよう、というようにつなげていくといいと思います。

ここで、児童が返答に困った時、黙り込んでしまった時に使える支援を紹介します。文部科学省の教科調査官の山田誠志先生の著書『自分の本当の気持ちを考えながら話す小学校英語授業』の中で、そこにいいことが書いてあったので、読んでみたいと思います。

1つ目は、具体例を挙げるということです。子供が困ってしまった、もう黙ってしまったな、という時は、先生自身のことでも発話をしてみてください。本の中にはこんな例が書かれていました。先生からDid you enjoy the winter vacation? と聞かれて、子供がちょっと黙ってしまったそうですね。沈黙が続いたので、そこで先生は自分のことを話しました。I went to my grandparents' place. I enjoyed eating Osechi. I enjoyed playing Fukuwarai. ここまでくると、なんか先生は冬休みにおせちを食べたりしたんだな、楽しかったことを言えばいいのかな、のように気付いて話せるようになるかもしれませんね。これは先生の場合です。その他、黙ってしまったら、お隣さんとか、他の子と同じ

ような質問をして、その応答から気付きを促すというのも、本当にいい方法だと思いますね。こういったこともぜひ、授業の中で子供が困ってしまったな、という時に使ってみてください。

次に行きたいと思います。皆様からは、Small Talk の実際を見てみたいとのことで、事前の要望として寄せられていましたので、今回はYouTubeのMEXT Channelから宮崎市立赤江小学校の岩切先生、ALTのジェイク・セイバー先生、この2人のSmall Talkの実際を見ていただきたいと思います。冒頭の4分10秒ほどをご覧ください。その際に、どのような対話方略が使われているかをご確認ください。

(動画上映)

皆さんいかがでしたか？ おそらく、中学校の英語の先生でも舌を巻くほどの、素晴らしいSmall Talkの実践事例だったと思います。ここで、岩切先生とジェイク先生が行った工夫についてまず見てみたいと思います。

最初に季節の話から入りましたよね。そこからスムーズに、winter vacationの話に入ってきました。さらに、写真とか絵カードをたくさん使って、視覚的にも理解を促進できるようになっていました。さらに、児童に言わせる場合にも、質問の形ではなくて、ポーズを置くことで、児童は答えます。質問を作るのが難しいなという方は、これでいいんですね。例えば岩切先生が、We have four seasons, Spring.と言ったら、もう子供たちがその後、Summerとか、Autumnとか、続いていきましたよね。あのようポーズを置くことで、児童の発話を促すということもいい方法だと思います。

次に、担任とALTでモデルの会話をしました。そこでジェイク先生が、いきなりI ate Shabu-shabu.と言わなかったんですね。しゃぶしゃぶを説明するのに、thin pork、薄い豚肉を何かお湯につけて、ソースにつけて食べるって、ここはちょっとゲーム形式になっていますね。これで子供たちは考えて、「あ、しゃぶしゃぶだ!」と言ったわけですね。

さらに、最後のキーワードの動詞の過去形は、これはさっきの絵カードに重なりますけど、黒板に貼っていらっしやいました。ここでは対話方略の「繰り返し」「さらに質問」が使われていましたよね。例えば、ジェイク先生がI went to Udo shrine (鵜戸神宮). と言ったら、岩切先生が、Udo shrine.というように、繰り返しを使っていましたね。さらに、ジェイク先生のUdo shrineに行った時の話に、岩切先生が、How was it?とか、Why?というように、どんどん疑問詞を重ねて質問していったのです。こうやってどんどん、対話が連続していったわけですね。そして、児童同士のペアの活動の時に、児童の目線に立って、岩切先生がお餅つきがわからない子供がいて、岩切先生もわからなかったんです。だから、これはあとでジェイク先生に聞こう、とおっしゃっていましたね。これでいいのです。こうやって、ALTの方にまた聞くというようにして、どんどん語彙を増やしていけるといいと思いました。とにかく、本当に素晴らしい実践でしたよね。

次は、本学の教職課程の学生に、教師と児童になりきって、Small Talkに挑戦してもらったビデオがあります。最初にご覧いただくビデオは、Small Talkの対話方略のポイントを私が指導する前です。まず学生に、先生役になって実演してもらいました。その後に、Small Talkに関しての対話方略や会話のやり取りが続くような工夫を指導し、それをafterとしてビデオを作りました。ではまず、指導前の様子をぜひご覧ください。

◆「Small Talkの対話方略を学ぶ前」の動画上映

前田先生：

これは、対話方略の指導前の映像です。皆さん、どのようにご覧になったでしょうか。今回教師役を務めてくれた学生は、本学の2年生です。全て英語で、オールイングリッシュでやっていたということは、私も褒めてあげたいと思います。ただ、なんとなく、先生から児童に対して一方的に話しているという印象が否めませんね。そこで、指導前の特徴をちょっと見ていきましょう。児童とのやり取りがほとんどなく、とにかく英語を一方的にしゃべりまくる、でしたね。そして、対話方略の繰り返しとか、確かめとか、一言感想をあまり使用しない。こういったことがまだできていませんでした。

そこで、私は以下のように気をつけるように、ということで指導いたしました。とにかく、児童と楽しくやり取りできるように、ちょっと何かゲームっぽいことを入れてみたらどうですか。これは工夫ですよ。それから、対話方略の「繰り返し」「確かめ」「ひと言感想」を入れると、もっと対話が続きますよ、ということも指導しました。ジェスチャーは大きめに、そして難しい単語が、すでに出てきていたものであったとしても、それは何度も復習をする。この辺りを注意して、指導してみました。

では次に、この対話方略を指導した後のSmall Talkの実際をご覧ください。

◆「Small Talkの対話方略を学んだ後」の動画上映

前田先生：

皆さん、いかがでしたか？ なかなか楽しそうな雰囲気になってきましたよね。では、ここで指導を受けた後のSmall Talkの変化として、どのようなものがあったかを確認したいと思います。

「対話方略」が使えるようになっていました。それは例えば、「繰り返し」であったり、「一言感想」だったんですね。例えば、野菜の種類を尋ねられて、cucumberと答えた児童がいました。そうすると先生は、Good. さらに、I like cucumbers. と、さらにまた言葉を付け加えて返していましたよね。また、「トマト」と言った子供に対しても、Oh, Tomato. と、英語の正しい発音で返していました。とてもよくなったと思います。

さらに、ゲーム形式ですね。これは児童の発話を引き出せるように、ゲーム形式にしたら、ということで、今回は先生の味噌汁の具を当てるクイズをやったと思います。子供たちからはたくさんの英語が飛び出しました。なかには、「しいたけ」と言った子がいて、それに先生はmushroomと答えていましたね。本来、実は、シイタケは、“shiitake”で大丈夫なんです。ですけれども、キノコ全般ということでは、mushroomというのはここではありかなと思いました。

このように、「対話方略」の指導を受けたことで、かなり雰囲気もよくなり、対話が続くようになってきたということが、ご覧いただけたのではないのでしょうか。

次にいきます。ここでは、担任の先生一人で授業を行うということを想定して、Small Talkをやってみたいと思います。本日はこの『We Can! 2』のUnit 8「What do you want to be?」を使って、少しSmall Talkをやってみたいと思います。3分ほどのものですので、ぜひ皆さんも児童になり切って参加していただければと思いますし、同時に大人の頭で、対話方略の何を使っているのかということも考えながら、参加してみてください。では、行きます。挨拶からいきます。

前田先生：Good afternoon, everyone.

児童役：Good afternoon.

前田先生：OK, how are you today?

児童役：I'm fine.

前田先生：OK. So, today we are going to talk about our future dream. What do you want to be? So, first, I'm going to talk about it, OK? So let's turn back time. So when I was six years old, I practice playing the Koto. Do you know a Koto?

児童役：Koto? Koto.

前田先生：Yes, Koto. That's right. It is a Japanese musical instrument. OK, look at this picture. Who is she? She is very cute. No? OK. Actually, this is me. I was playing the Koto. OK, I have one question. How many strings are there on the Koto? Once more. How many strings are there on the Koto? Do you know strings? Do you know strings?

児童役：わからないな。

前田先生：OK, I give you a hint. OK, the guitar has six strings. The guitar has six strings.

児童役：ああ、弦、弦。

前田先生：Yes, strings are called “gen” in Japanese. OK. So, this is Koto, right? OK, how many strings are there on the Koto? OK, let’s count together. One, two, three, four, five, six, seven, eight, nine, ten, eleven, twelve, thirteen. Yes, there are thirteen strings on the Koto. There are thirteen strings on the Koto. So, please repeat after me, there are thirteen strings on the Koto.

児童役：There are thirteen strings on the Koto.

前田先生：Very good. OK, I like the sound of Koto, so I wanted to be a Koto player at that time. So, what do you want to be in the future? Let’s talk about it with your partner.

ここまでが導入の部分ですね。もしこの日にALTに先生がいらしたら、ALTの先生との掛け合いもいいですし、また担任一人の場合には、この会話の流れを黒板に示すということもできるかと思います。

今ここで、どういった方略が使われていたか確認してみたいと思います。

まずは最初のところからです。When I was six years old, I practiced playing the Koto. これは過去を表す表現が、その前でも習っていますので、既習事項の定着を図るという意味で入れてみたセンテンスです。

次に、Do you know a Koto? おそらく児童たちはピンと来ていると思います。でも、ここで一応、対話方略の質問を使ってみました。

さらに、How many strings are there on the Koto? これも質問です。さらに既習事項の数を尋ねる表現、これの確認でもありました。私が2回言ったのを覚えていますか? How many strings are there on the Koto? このように、ゆっくり「繰り返し」という方略を使ってみました。そしておそらく、小学生はstringsという単語は、知りません。でも、ここで紐ということをしるしでしたり、あとギターには6本あるよ、というヒントを与えたりすることで、「さらに質問」という形で使ってみました。

最後に、対話方略の「ひと言感想」ということで、これだけの対話方略を使っても3分ほどで終わってしまうんですが、このようなSmall Talk をやってみました。

どうでしょうか? 対話方略が使えるようになると、本当にSmall Talk も楽しくできたり、少しでも長く言えたりするようになるかと思うので、ぜひ皆さんも使ってみてください。では、ここから石鍋先生にバトンタッチをします。

石鍋先生：

皆さん、こんにちは。明海大学の石鍋です。私からは、「Small Talk からデジタル教科書への接続」について、お話をさせていただきます。ご承知のように、デジタル教科書には、教員用と学習者用とがあります。今、学校現場の多くでは、教員用が使われているはずですが、ですから今回は、教員用に絞ってお話をさせていただきます。とはいえ、デジタル教科書の機能・使い方は、各教科書会社が説明書を詳細に作っていますので、使い方等の方法はぜひそれを各学校でお読みいただければと思います。ご承知のように、デジタル教科書には様々な機能が含まれています。また、児童の実態に応じて、どの機能を使うか、この取捨選択は先生方にかかっているわけです。これは他の教科と全く同じです。

皆さんの多くは、電子黒板等でデジタル教科書を提示しているのではないのでしょうか。教科書には例えば、ここにあるように音声、映像、チャンツ、歌、アクティビティ、そして様々な付属機能もあります。そして、デジタル教科書には先生方の代わりに発音してくれる、先生方の代わりに見本を見せてくれる。そのような機能もあります。また、先生方は英語の発音も学べます。英語の表現も、新しいものを知ることができます。

では、学校現場で先生方は実際にどのように活用しているのでしょうか? 考えてみましょう。私も仕事柄、たくさんの小学校、外国語活動外国語の授業を見せていただいています。ですが、先生方の中には、音声や動画を順番に視聴するだけ、指示に従って学習するだけ、音声を聞き取るだけ、一緒に歌うだけ、また動画を真似るだけなどの様子を見

ることがあります。もちろんこれらは、音声を聞かせたり、見本を見せたりしてくれるというメリットはたくさんあります。でも、それだけでいいのでしょうか？ というのが、私から皆さんへの投げかけです。デジタル教科書に全て任せていませんか？ もう1つは、教師側のねらいに沿った使い方になっていますか？ という質問です。もちろん、ここにいらっしゃる皆様は、様々な工夫をしている方もたくさん知っています。ですが、多くの小学校では、この吹き出しにあるように、2つの疑問を投げかけたい場合もあるのです。

私が大学で使用している教科書に、次のように記されていますので、読んでみます。

デジタル教科書に振り回されないこと。もう1つは、教える側の必然性は重要です。こんな授業を展開したい、こんな能力を身に付けさせたい、これをはっきりさせていますか？ ということです。教育界の名言、「教科書を教える、ではなくて、教科書で教える」。これは、デジタル教科書にも全く当てはまることだと思います。

今年度から、5年生、6年生は教科書になりましたから、地区によって違う教科書が使われています。ですから、今回の講座はそれぞれの教科書を扱うのではなくて、先ほど前田先生が使ってくれた、昨年まで使っていた文部科学省の教材『We Can! 2』を使ってみます。P.61のUnit8「What do you want to be?」のアクティビティ。ここに、将来どんな職業に就きたいかを尋ね合い、わかったことを四角に書こうというものがあります。会話の文章は、1人1文ずつです。先生方の多くは、これを見て、どのようにご指導されるでしょうか？ 実は、P.58、59前段でこのように様々な職業の名前を学習しています。これらの単語、語句を入れ込んで練習させる方がきっとたくさんいらっしゃるはず。他の工夫をされている方もいらっしゃるかと思います。

ここでおさらいになります。先ほどの前田先生のSmall Talkのねらいを再確認してみましょう。対話方略の①～⑥をもう一度スクリーンで確認をしてください。

Small Talkは帯活動で行うために、本時のめあてや題材、本時の活動とは全く別なものと考えている先生もいらっしゃるかもしれません。もちろん、帯活動ですから、日々繰り返しがあり、その繰り返しの積み重ねはとても重要になってきます。ですが、Small Talkで学習したことを、めあてや題材、活動と結び付けることはできないのでしょうか？ そんな発想はないのでしょうか？ もちろん、もうやっていますよ、という先生もいらっしゃるでしょう。でも、まだやってなかった、と思う先生は、こんな発想を今一度自分の心の中に留めてみてください。

先ほどのアクティビティ、AさんがHi, what do you want to be? BさんがI want to be ~. という会話を練習します。対話方略を使う前に、この2つの文だけで練習をすると、実はこれらの文に慣れるという意味では、効果が上がります。ただ、それで終わってしまいますよね。ですから、次のように考えるとどうでしょう。2つのパターンを私の方から皆さんに提供したいと思います。AとBをやっただけのパターン1とします。これからのパターン2とします。

A: Hi, Bさん. Good morning.

B: Hi, Aさん. Good morning.

A: How are you?

B: Oh, I'm good. How are you?

A: I'm fine, too. Thank you. What do you want to be?

B: I want to be a rock musician.

A: Oh, cool!

このような、パターン2をやってみました。実は対話方略の、「①対話の開始」と「④ひと言感想」としてOh, cool! を入れてみました。それだけでもだいぶコミュニケーションが図られているイメージになるのではないのでしょうか。

では、もう1つのパターンをやってみます。パターン3です。

A: Hi, Bさん. Good morning.

B: Hi, Aさん. Good morning.

A: How are you?

B: Oh, I'm good. How are you?

A: I'm fine, too. Thank you. Yesterday, I watched a baseball game on TV.

B: Oh, baseball game?

A: Yes, I like baseball very much. I want to be a professional baseball player.

B: A professional baseball player? Oh, cool!

A: What do you want to be?

B: I want to be ~ .

このようにやってみました。実は、方略の「②繰り返し」を加えたんですね。Baseball player? と繰り返したわけです。それを入れるだけで、かなり先ほどのアクティビティに、2つの文のアクティビティがコミュニカティブな活動になっていくということがおわかりになったかと思います。今すぐでなくても、少しずつ、実際のコミュニケーションに近いアクティビティになるように、先生方ご自身で日々工夫をしてください。それが、子供たちに積み重なっていき、3か月経った時、半年経った時、子供たちのコミュニケーション能力は見違えるほど上がっていくと、私は信じています。

最後になります。今後は教員用だけでなく、学習者用のデジタル教科書も広く出てきます。どのように活用するかを考えていくことも、先生方にとって重要なポイントになってきます。これは、文部科学省のホームページから抜粋しました。国は、デジタル教科書のメリットも考えていまして、それをまとめて載せてくれています。ぜひ時間を取って、文部科学省のネットを開いてみてください。今後のデジタル教科書の在り方を探ることができるはずです。

短時間でしたが、私からの話は以上とさせていただきます。これからまた前田先生に引き継ぎます。ありがとうございました。

前田先生:

ここからは、先生方にチャレンジをしていただきたいと思います。チャレンジタイムの時間です。まず各拠点校におきまして、お近くの方とペアになっていただきたいと思います。事前課題でもご連絡した通り、この2つのテーマのうち、どちらか1つを使ってSmall Talkをしてください、という事前課題がございましたよね。ですので、用意してきたものを、時間的には1人2分ずつ程度お互いに見せ合うということをやっていただきたいと思います。4分経ちましたら、またこちらからお伝えいたします。では、どうぞ。

(拠点校でのアクティビティ～4分経過)

前田先生:

Thank you everyone. Time's up. 4分経ちました。どうですか、Small Talk、今大変盛り上がっているところもあるようですね。ここからは、各拠点校のから1名の先生方にSmall Talkをぜひ披露していただきたいと思います。今日の順番は、皿沼小学校、亀田小学校、明海小学校、雄物川小学校。このような順番で行きたいと思っておりますので、まず皿沼小学校の方、カメラの前にいらしてください。それ以外の方はカメラの前でスタンバイしておいてください。ありがとうございます。では、ぜひお願いします。

◆ Small Talk の披露 (先生方のチャレンジタイム)

① 東京都足立区(会場: 区立皿沼小学校)

皿沼小: Hello.

前田先生: Hello.

皿沼小 : Nice to meet you.

前田先生 : Nice to meet you, too.

皿沼小 : My name is Koichiro Kashio.

前田先生 : Yes, my name is Takako Maeda.

皿沼小 : I like Chinese food. I like soup dumplings, Shoronpo in Japanese, and meat ban, it's so juicy and delicious. Do you like Chinese food?

前田先生 : Yes, I like Chinese food very much. I like Ramen, noodle.

皿沼小 : Noodle! me, too. I like noodle paste Tonkotsu.

前田先生 : Yes, I like Miso ramen.

皿沼小 : Ramen, oh. What food do you like?

前田先生 : Actually, I like Korean food, very spicy food.

皿沼小 : Spicy food.

前田先生 : Yes.

皿沼小 : What kind of Korean food do you like?

前田先生 : I like Chapchae. Do you know Chapchae?

皿沼小 : Yes, I know.

前田先生 : It's my favorite.

皿沼小 : Oh, your favorite food. What food do you like another?

前田先生 : I like Sushi, too.

皿沼小 : Sushi. Me, too.

前田先生 : What kind of Sushi do you like the best?

皿沼小 : I like Tuna and Salmon.

前田先生 : OK, thank you. Two minutes. Thank you very much.

皿沼小 : Thank you.

前田先生 :

では続きまして、亀田小学校の方お願いします。

② 東京都足立区(会場: 区立亀田小学校)

亀田小 : Hello.

前田先生 : Hello.

亀田小 : My name is Maiko Okajima.

前田先生 : My name is Takako, nice to meet you.

亀田小 : Nice to meet you, too. Today, I introduce my hometown, Iwami-cho, Tottori. Do you know Iwami-cho?

前田先生 : Sorry, I don't know Iwami-cho, but I know Tottori.

亀田小 : OK, I see. My hometown, Iwami-cho has three beautiful things(scenes). First, Iwami-cho has beautiful mountains. Do you like mountain?

前田先生 : I don't like it so much, but I like to see. Sorry.

亀田小 : There are beautiful flowers and beautiful big trees.

前田先生 : Trees, huh. OK.

亀田小 : So I was kid...

前田先生：Sorry, I can't hear you. Once more, please.

亀田小：When I was a kid,

前田先生：OK, when you were a kid,

亀田小：I always looked at the mountain. very good.

前田先生：次は、明海小学校の先生、お願いします。

③千葉県浦安市(会場：市立明海小学校)

明海小：My name is Sayaka.

前田先生：Hello, Sayaka. My name is Takako.

明海小：How are you ?

前田先生：I'm fine. How about you ? How are you ?

明海小：I'm good.

前田先生：OK, very good.

明海小：I like Pizza. What food do you like ?

前田先生：I like Udon very much.

明海小：Oh, Udon. What kind of Udon do you like ?

前田先生：I like Kenchin udon very much. How about you? What kind of Pizza do you like ?

明海小：I like Margarita.

前田先生：Margarita, OK.

明海小：It's very delicious.

前田先生：Yes, I think so. Ask something. ... Ok, what food do you like ? You like Pizza, anything else ?

明海小：I like hamburger.

前田先生：Hamburgers! You are American. You like Pizza and hamburger. OK, that's good. Thank you very much.

前田先生：

最後は、雄物川小学校の先生方、よろしくお願いします。

④秋田県横手市(会場：市立雄物川小学校)

横手市：My name is Masaki Ogata.

前田先生：Masaki-san, nice to meet you.

横手市：How are you?

前田先生：I'm fine. And you? How are you?

横手市：I'm hungry.

前田先生：Hungry. OK.

横手市：I ate Natto-jiru. Do you know?

前田先生：Actually, I love Natto, but I have never eaten Natto-jiru.

横手市：Please try.

前田先生：OK, someday.

横手市：Can you see this?

前田先生：Yes. What's that?

横手市：This is textbook.

前田先生：Textbook.

横手市：We have “We Can! 1” textbook. Unit 8. Open your textbook to page 58.

前田先生：OK.

横手市：What national flags do you see?

前田先生：OK, I can see Korean flag, Australian flag, yes. How about you? Can you say the name of the flag?

横手市：Yes. French flag.

前田先生：French flag, yes.

横手市：Russian flag.

前田先生：Russian, yes, Russian. Yes, this one.

横手市：Indian flag.

前田先生：Indian flag, yes.

横手市：What countries do you like?

前田先生：I like Korea, because I like Korean food. How about you?

横手市：I like uhm... fish and chips.

前田先生：Fish and chips, so you mean

横手市：Australia.

前田先生：Australia, OK. Thank you very much. Time’s up. Thank you very much.

=====

石鍋先生：

先生方、ありがとうございました。私なりに感じたことなので、他の先生方違うコメントがあれば、また各会場でシェアをしてください。まず、全体を通しますと、対話方略を使おうとする努力はよく見られましたよね。特に「①対話の開始」。私がとてもいいなと思ったのは、Hi, とか、How are youとかじゃなくて、皆さん笑顔だったんです。やっぱり笑顔とアイコンタクトは、とても大事ですから、子供たちに常に意識をさせるといいと思います。その意識はとてもよかったと思います。

次です。「⑤さらに質問」、これはたくさん出ていましたね。1つ例を挙げさせていただきますと、あけみ小学校の先生とのやり取りで、What food do you like? 次に、What kind of Udon do you like? と、さらに付け加えた細かい質問に入っていきます。これはどのグループの先生方もできていたと思いますね。とてもよかったと思います。そして、「④ひと言感想」も、Ohとか、Wooとか言う、いろいろありましたが、ひと言感想、それに対する自分の「そうだよね」という雰囲気は出してくれていたと思うんですね。

ただ、私が1つ課題だと思ったのは、思ったよりも、「②繰り返し」が少なかったのではないかなと思います。実は繰り返しは、話をつなげる要素でもあるのですが、相手を「聞いているよ」という意思表示にもなるんですね。ですが、自分が話す英語に夢中になりがちなので、繰り返しは意識をしないと、なかなか難しいところなのです。ですから、今回私が感じたのは、繰り返しを意識してみることを、先生方をお願いしたいと思います。Do you like baseball? Yes, I like Giants. Oh, Giants.のように、繰り返してみてください。ありがとうございました。

=====

◆質疑応答

配信スタッフ：

それではこれから、質疑応答の時間とさせていただきますと思います。

横手市：

横手市立雄物川小学校の小沼です。今日はありがとうございました。今5年生の担任をしていて、Small Talkはまずインプット中心がねらいだということを教えていただいたのですが、主にSmall TalkはALTの先生に話してもらっていて、その時の日本人教師として、子供たちにどんなところに注目させて、どんなところで言葉がけをすればいいのか教えていただけたらと思います。

前田先生：

MEXT Channelの岩切先生のビデオを思い出してもらいたいと思うんですね。あの時は、岩切先生もたくさんお話をされていましたが、ジェイク先生がどこかに行ったという話をされて、ひと通り終わったところで、ジェイク先生の話を確認する場面があったかと思います。例えば、Jake-sensei went to Udo shrine with ...? と言うと、子供たちが、ああ、お母さん、Motherと言ったりしましたよね。つまり、ご自分で組み立てるのが難しいときは、ALTの先生方の言葉を受け取って、それを確認する作業で、参加するっていうことができるのではないかと私は思いますが、いかがでしょうか？

石鍋先生？

石鍋先生：

いいと思います。

前田先生：

ぜひやってみてください。ですから、やっぱり事前に打ち合わせは必要だと思いますので、どんな話をなさるかを聞いて、どこを質問にしようかを考えて、授業を構成されるといいのではないのでしょうか。

配信スタッフ：

ありがとうございました。続きまして、亀田小学校に行ってみましょうか。

亀田小：

亀田小の剣持です。Small Talkのお話のところ、これまでのいろいろな表現の復習にも使えるし、その単元、本時の導入にも使えるというのが、非常に勉強になりました。ありがとうございました。

その上で、少し話がずれてしまうかもしれませんが、表現を聞き取れたり、少し習い事をして自分たちが慣れてしまったりしている子供たちは、この表現は前の時間に使ったな、また先生はその表現を使っているな、と気付けますが、そうでない子供たちも、実際にはクラスの中にいます。その時に、その子供たちをきちんとフォローできているのかというのが、個人的にすごく心配で。Small Talkで身に付けさせていきたい表現とかを、何か教室の掲示などで定着を助けられるのかなというのを考えているんですが、今は掲示していないんですが、今後掲示があると、さらにそういったものを引き出せたり、子供があそこを見れば、「あの表現を今、先生言ったんだ」というのでつながったりするかと思うのですが、何か掲示のことなどでご指導いただければと思います。よろしくお願いします。

石鍋先生：

まず、子供たちは忘れてしまう子がいる。これは当然だ、ということで思ってください。これは外国語であって母語ではないので、普段使っていません。だから、授業の冒頭部分は、前の時間を思い出すような、繰り返しの練習などが入っても結構です。その後にSmall Talkに入っていくと、苦手なお子さんも入りやすくなる。これをまず1つお伝えします。掲示はぜひ、使ってください。先ほど前田先生が、吹き出しのような形で掲示を作っていましたね。基本になる表現を貼っておいて、自分で選んできて、それを真似して使ってみよう、というのは前段であって構わないと思います。ただし、1つだけ注意です。完璧に読めるようになるということを求めてしまうと、子供はその吹き出しに書かれている英語を全て読もうとしてしまいますから、自分の思いをそこに入れ込むことが苦手になってしまう場合があります。ですから、ヒントになるように貼ってあるからね、ということを伝えてあげてください。

配信スタッフ：

ありがとうございました。それでは、皿沼小学校いかがでしょうか？

皿沼小：

皿沼小学校の星野と申します。今6年生の担任をしていて、外国語を子供たちに教えているのですが、私も授業の中でSmall Talkを活用することにチャレンジしています。授業の中で、できるだけ、Today's Goalにつながるように内容を考えて、今のところ子供たちは、聞くことには慣れてきたんですが、なかなか英語を活用することまでいかないことがすごく困っています。先ほど、Small Talkの話を受けたときに、5年生は教師と子供での対話をするのがSmall Talkの目的で、6年生になってくると子供同士でのやり取りをSmall Talkで活用していくことが大切だ、とお話をされていましたが、でもなかなか、Small Talkの中で、「はい、じゃあ子供たちどうぞ」という流れを作ることができなくて。何かいい方法とか、いいアドバイスがあればと思って質問させていただきました。

前田先生：

先ほども、学年にこだわる必要はないですよ、という話をさせていただきました。もちろん、3、4年生の先生でも、インプットから入っていけばできるし、5年生でもある程度定着が図れたなと思ったら、今度はアウトプットのペア活動もできます。ですから、6年生だって、インプットをやってもいいわけですよ。そういう場合には、入れてあげるところが足りてないのかもしれないので、自信が持てるまで入れてあげてください。あとは、クラスの中である程度できる子たちもいくつかできてくると思いますので、例えばそういう時に、ペアを組み替えてみる。いつも隣同士の人とするというのが多いかもしれませんが、今日の英語の時間はちょっと席替えしてみましょう、などと、ここは担任の先生の腕の見せどころだと思いますが、組み合わせを考えて、会話が進むような形をやる。ですから、アウトプットにそれほどこだわらなくても、まだインプットが足りていないのかも、と思ってやっていただくということでもいいのではないかなと私は思います。

配信スタッフ：

ここで質疑応答の時間を締めさせていただきます。ありがとうございました。

石鍋先生：

本日、私たちの講座にお付き合いいただきまして、ありがとうございました。これからまた思い出していたり、他の先生とお話をしていく中で、疑問が出てきたりということは、多々あると思います。それはリフレクションシートなどに質問を書いていただいてもよいですし、また、教育委員会の先生を通して、我々に投げかけていただければ、お答えできますので、ぜひ課題を見つけてください。私が言うまでもなく、課題を発見することは、課題の解決につながって、その解決をすることが成長につながるというのは、皆さんたちが子供たちに伝えていることだと思います。ぜひ同じように考えていただければと思います。

(講座後タスクの告知と事務連絡)

それでは、今日は誠にありがとうございました。我々も大変よい勉強をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

前田先生：

ありがとうございました。